イギリス滞在記

The Life and Times in the United Kingdom

石田尚之

Naoyuki Ishida

1. はじめに

ユニオンジャックと女王陛下。フィッシュアンドチップスにローストビーフ。パブでビール、紅茶にスコーン。変わりやすい天気と分厚い雲。ビールズにストーンズ、ブリティッシュロック。昔読んだシャーロックホームズにシェイクスピア。こんなステレオタイプの知識しかないまま、上空から初めてイギリスを見下ろしたときの高揚感と非現実感を、今も時々思い出す。一日の殆どが重たい雲で塞がれる空はとても憂鬱だったけれど、たまさか見える青い空は途方もなく美しかった。ちょっと疲れた時にふと目に留まった、木々の鮮烈な緑、艶やかな花の色に心が吸い込まれたとき、イギリスに暮らしているんだ、という実感が湧き出てきた。

2006年2月から1年間、筆者はイギリス中部のリーズ大学に滞在する機会を得た。以前から漠とした海外への志向だけはあったが、ある日突然、自分の年齢を考えて、早くしないと身動きがとれなくなるかもと慄然とし、とにかく上司に直談判して許しを得、研究費から滞在費を捻出し恩師東谷公先生（京大）に留学先を相談して念願の留学となったわけである。

短い滞在ではあったが、そこで得られた経験は何物にも代えがたいものであった。イギリスで自分が感じ、考えたことを綴ってみたい。

2. リーズ大学と研究

イギリスとリーズの概要については、三尾浩氏が本誌2003年10月号の海外報告に非常に詳しくまとめておられるので、ぜひそちらを参照いただきたい。リーズは歴史的に羊毛業と工業を軸に、イギリス中部の要所として発展した街であり、世界で初めての商業鉄道はリーズに石炭を運ぶためのものだったそうである。20世紀半ばに産業の不振により一時衰退したが、近年になって主に金融業を積極的に誘致することで再び

図1 リーズ大学の校舎 (Great Hall)
赤レンガが美しい。

経済が上昇、現在はイギリスで最も成長し続けている都市の一つであろう。滞在中のイギリスは、至る所で景気の良さが感じられたが、街のあちこちでビルディングが建設され、次々とウォーターフロントが再開発されているリーズのダイナミックな発展ぶりは、その中でもひときわ目を引く。そしてこの好景気のせい、物価高には驚かされた。例えばマクドナルドのセットメニューでも4ポンド強（約1000円、£1 = ¥240換算）もするし、借りたフラット（アパート）は1ベッドルームの日本並みの広さで月約600ポンド（約14.4万円、同）であった。それでも、大多数のイギリス人が日本の方が物価が高いと思っているのだから、世界は広いものだ。

リーズ大学は、いわゆる Red Brick と呼ばれる、19世紀半ばから20世紀初頭にイギリス各地に創設された総合大学の一つである。工学系学科のレベルが特に高く、大手新聞の一つ Guardian 紙の最新のランキングでは、化学工学部門で1位に輝いている。筆者が所属した Institute of Particle Science and Engineering (IPSE) は、Faculty of Engineering 内の School of Process, Environmental and Materials Engineering (SPEME) に属する研究組織である。親日家である Mojtaba Ghadiri 教授が Director を務めておられることもあり、何かと日本との繋がりが深い。乾式、湿式、実験、シミュレーションと、およそあらゆる分野の粉体関連の研究が行われ、粒子に特化した組織としては世界的にも、米フロリダ大学や豪州メ

(独) 産業技術総合研究所 環境管理技術研究部門 研究員
(〒305-8569 つくば市小野川16-1) TEL 029-861-8154
National Institute of Advanced Industrial Science and
Technology (AIST)
(16-1 Onogawa, Tsukuba, Ibaraki 305-8569, Japan)

ルボン大学の研究所と並んでトップレベルにある。

筆者が滞在したのは、IPSE の中でコロイド・界面工学を担当する Simon Biggs 教授の研究室である。彼は年齢は 40 代前半とまだ若い、原子間力顕微鏡 (AFM) を用いた表面間力の研究で多くの優れた業績を残している。研究については非常に精力的だが、人柄は陽気で気さく、いつも冗談を飛ばしている。また、彼は若くして Faculty of Engineering の副研究科長も務めている。ちなみに、このような役職は持ち回りや指名で決まるのではなく、自薦でしかも候補者はマニフェストを提出し、それを元にきちんとした面接や選挙を経て決定されるものらしい。いかにもイギリスらしい話ではある。

研究室では、高分子ミセルの吸着と構造制御などの基礎的な研究から、濃厚サスペンションのレオロジーやろ過、マイクロカプセル生成などの応用研究まで、「液相中の微粒子」をキーワードにかなり幅広いテーマが扱われていた。研究室の構成はポスドク 2 名、ドクターコースの学生が 7~8 名で、国籍は多岐に渡る。特にポスドクとして、酒井健一博士 (現東京理科大) が活躍されており、筆者も公私に渡り大変にお世話になった。このように IPSE に在籍する職員・学生は世界各国から人が集まっており、特にアジア系の人たちが半数以上を占めている。これには驚かされたが、イギリスの現況からはそれほど珍しいことでもないようだ。

研究室の雰囲気は大変に自由であった。Simon は、研究については大まかな方向を示した後は、各自にかなりの部分を任せていた。そして、毎日暇のある時に声をかけて回り、雑談のように研究の話をしながら、細かい助言や方向修正を行うというスタイルだった。毎週のミーティングも、コーヒーやお茶、お菓子を持ち寄って、とてもリラックスした雰囲気の中で行われていた。また、結果さえ出していれば、学生は何時に研究室に来て何時に帰ろうが自由なので、学生は自分のペースで研究ができる反面、それなりの自己管理も求められる。筆者の場合も、渡英前にあらかじめやりたい研究の大まかな方向を伝えてはいたが、改めて Simon に相談しようとしたら、「自由にやってくれ」と言われ、殆ど思うままに研究することができた。最終的には、Simon を始め研究室の人々とのディスカッションのお陰もあり、表面に固定した温度応答性高分子の相転移を、AFM によって直接観察したり、重量測定装置である水晶振動子マイクロバランス (QCM) を、高分子の構造変化の評価へ応用したりという、あまり他に例のない研究に漕ぎ着けることができた。

イギリスで研究をする上で印象に残ったのは、イギリス人はとてもディスカッションが好きだということ

図2 Simon Biggs 教授 (右) と筆者

だ。これは欧米人全般に言えることかもしれないが、研究はもちろん、天気から政治の話に至るまで、一人一人が確たる自分の意見を持ち、また相手の意見も尊重しながら、長々と喋っている。学生にしても、意識は先生と対等で、立場や知識・経験の差を気にせず、常に堂々と自分の意見を主張するので、少々びっくりした。率直に言えば、装置などハード的な面は、イギリスは全体的に日本よりも劣っている。それにもかかわらず多くの質の高い研究が行われているのは、自分の研究について、納得いくまで何時間でも話し合い、それによって生まれるアイディア、解釈、独自性を大切にしているからではなかろうか。また、常に確たる自分の意見を持ち、それをきちんと人に伝える、という習慣は研究のアピールやプレゼンテーションの上手さに通じている。日本の研究も内容では全く劣ることはないが、研究の背景や動向、必然性などを説得力を持って語ることで、研究を魅力的に見せる点では、言語的な有利さ以上にイギリスの研究者に一日の長がある。自分の研究を世界に知ってもらうには、研究内容ばかりでなく、それをどうアピールするかも同じように重要だと肌で感じたが、こういうバックグラウンドを見るにつけ、習慣の違いが非常に大きな差になっていると思われる。

筆者はイギリスに来る前には、イギリスの研究環境もアメリカと同じように競争的で、成果主義であると思い込んでいた。しかし、それは少し違うようだ。イギリス人にはアメリカ的な考え方、価値観が好きでない人も多いし、論文数、IF、特許数、というように定量的に研究を評価する傾向は、日本と比べても薄いように思う。それよりも自分の納得のいく研究をして、時間がかかってもいい論文をじっくり書こうという人が多い。また、アメリカに行っても、競争的な雰囲気を嫌って帰ってくる研究者も多いとも耳にする。欧米というカテゴリで一つに括られがちだが、その辺の雰囲気はアメリカと欧州ではかなり異なっているのではなかろうか。

また、この年はちょうど SPEME の設立 100 周年にあたり、秋には式典などの記念行事が行われた。筆者

も外部から来た研究者の代表として、記念行事の中でリーズでの研究を発表させて頂ける光栄に浴することができた。このような大変名誉な機会を与えて下さった Ghadiri 教授に心から感謝したい。

3. イギリスでの生活

3.1 パブとビール

イギリスといえば何といってもパブ、ビールである。どんな小さな町にもパブがあり、夜は地元の馴染み客を中心にあらかた満員になる。パブはイギリス文化の中核をなしていると言っても決して大げさではない。パブでは飲むばかりでなく、食事をとることができる。しかし、夜にはビールだけをちびちびと、ほとんどつまみなしで長時間飲んで過ごすのがスタイルらしい。健康にはとても悪そうだ。ビール腹の男性が多いのはこのせいだろうか。

イギリスのビールは、種類がとにかく豊富で美味しい。一杯1パイント(約568ml)という単位で大体2~4ポンド、他の物価からすれば安いといえる。大概のパブでは、大手会社の定番ビールもとともに、エールといわれる上面発酵によって作られるビールが並んでいる。このエールビールは殆どがいわゆる地ビールで、銘柄により色々な特色があって非常に面白い。研究室では、毎週金曜日になると皆で建物の向かいにあるパブに行き、昼食を共にする習慣であった。そのパブは、客の大半が大学の先生・職員・学生で占められていたが、みな昼から堂々とビールを飲み、午後からまた仕事をしている。およそ日本では考えられない光景でびっくりしたが、そういう時には筆者も、ここぞとばかり異文化の吸収に努めたものだ。

3.2 サッカーとワールドカップ

イギリスではラグビー(リーズには強豪プロチームがある)やクリケットも国民的なスポーツとして人気があるが、サッカーに対する情熱は特別で、生活に欠かせないもののように感じられる。プレミアリーグを筆頭に、各レベルで数多くのチームが存在し、週末は「おらが町のチーム」の応援で大変に盛り上がる。また、筆者の滞在した年には、ちょうどワールドカップがドイツで開催され、イングランド代表チームが出場、かなり期待されていた。当然リーズでもお祭りのような雰囲気である。家の窓や車にはイングランドの旗が翻り、ニュースも新聞もやれ選手のプレーがどうだ、監督の采配がこうだと連日囂しい。イングランドの試合の時間ともなると、試合を見る男性客でパブは昼間でも超満員、道を歩いているのは女性かアジア・中東系の人たちだけ。試合に勝とうものなら、代表ユニフォームを着て酒に酔った人々が、街中を練り歩き応援歌を大合唱の大騒ぎである。大学の研究室では学

図3 研究室の面々

生主催の賭けが公然と行われ、イングランドの試合の日には、学生は昼からパブやパブリックビューに応援しに行ったまま帰ってこないのはおろか、Simon や他の研究室の先生でさえも気もそぞろで、いつの間にか早退してしまうという有様であった。結局イングランドは決勝トーナメントで惜しくも敗れてしまったが、この盛り上がりようは近代サッカー発祥の地の名に恥じない?ものであった。

3.3 古いものを大切にする人々

イギリス人が古いものを大事にする(しすぎる)というのは良く聞くとこであるが、こと「住」に関しては、それが特に実感される。石造りがほとんどであるため、築百年の家など全く珍しくないし、家は古くなるほど値段が上がるらしい。筆者が最初に借りたフラットも、元々は非常に古い石造りの一軒家で、大家が自分自身で全て改装したものだったが、半地下の倉庫までモダンなりビングになっていたのには驚嘆させられた。これは決して特別なことではなく、多くのイギリス人は古い家を自分でリフォームし、住みやすいようにするのに並々ならぬ精力を注いでいるらしい。有名なガーデニングもこの一部で、住居の「外側」へのこだわりであるといえる。

建物に限らず、町並みや郊外の風景なども、昔ながらのものが多く。特に、郊外の田園地帯は無闇な開発が入らず、美しい風景が残されている所が非常に多いのが印象的である。これらも、古いものを大事にする、あるいは、今あるいいものを極力残す、という姿勢の現れであろうか。

3.4 「自由と寛容」の国

留学前には筆者は、当然「イギリス=先進国=生活には困らない」と思っていた。しかし実際に暮らしてみると、大概の商店は午後6~7時には閉まってしまうし、コンビニエンスストアなど数えるほどしかない。公共の手続きはやたらに時間がかかるし、インターネットは遅いし、バスや電車は時間通りに来ず、郵便はきちんと届かない。街はゴミだらけで汚いし、生活用品の質はひどいものだ。これには面食らった

し、最初はいらいさせられた。そういう所だけ見れば、「何でも便利でキレイな国、日本」から来た目には、イギリスは半世紀以上前までの栄光から、すっかり時間が止まっているような感じさえする。

でも、イギリス人を見ていると、そんなことは皆気にせず、気楽そうなのだ。一生懸命働いているのに、やれ負け組だの格差だのと、いつも何かに追われている日本人と比べ、ストレスなどとは無縁に見える。どうしてあんなに気楽に、リラックスして生活できるのだろうか？自分自身も、イギリスの空気に触れて呼吸が安らぐような思いで過ごせたのはなぜだろう？

たぶんそれは、イギリス社会の根本にある寛容さ—あるいは「ゆるさ」にあるのではなかろうか。イギリス人と接して印象に残るのは、彼らは確かに個人主義で、人は人、自分は自分なのだけれど、確固として自分の自由を重んじる分、人にもとても寛容だ。ほとんど「適当」といっても良いくらいだ。電気やガスが止まっても、バスや電車が盛大に遅れても、人々はあまり怒ったりもせず、淡々としている（もう諦めている、という見方もあるけれど）。自分も自由に、適当に行動する代わりに、人の行動にもとやかくは言わない。意見の違いはあっても、価値観の違いが攻撃されることはない。この自由で寛容な気質は、色々問題も生み出しているけれど、一方で社会をとても居心地良く感じさせていることも確かだ。これが、たくさんの移民や違う文化を受け入れてきた土台なのだろうか。それとも逆だろうか。

そして、その寛容さと地続きにあるのが、人と人の間の垣根の低さだ。道に迷えば必ず誰かが声をかけてくれるし、こちらはどう見ても外国人なのに平気で道を聞いてくる。店で買い物をするれば隣のご婦人が「その商品はいいわよ、私もこの前それを買ってねえ・・・」と延々と話しかけてくるし、鉄道で4人がけの席になれば、知らない同士でも話に花が咲き始める。そして、こういった人と人の関係は、イギリスあるいはヨーロッパ的な相互扶助精神に昇華している。それは福祉とか寄付といったこともあるけれど、それよりもっと些細な、目立たないことにこそ、その本質があるように思うのだ。例えばバスを降りるときには必ず運転手にお礼を言い、建物では後の人のためにドアを押さえ、道は譲り合い、ぶつかったら目を見て“sorry”と言いあい、車椅子には手を貸し、優先席はすぐに譲り、道でお年寄りが転んだらすぐに誰かが助ける、といったように。とても些細なことばかりだが、これらはなるべくお互いが気持ちよく生きていくための「知恵」ともいえる。とても残念なことに、日本でこういう光景を目にすることは年々急激に減っているのだけれど、ここでは誰もがとても自然に、さりげなく人に

手を差し出している。基本的に人は人、なのだけれど、他人への助けも惜しまない。それぞれが自分の思うまま、少しずつ手を差し伸べあうことによって、結果的に皆が少しずつハッピーになっている。ステレオタイプな見方では、「欧米」の個人主義は、時として自分勝手なギスギスした状態を作ると思われがちだ。しかしここで目にしたのは、それとは少し異なる、もっとゆるくて人間くさい社会だった。

だからといって、もちろんイギリスは約束の地ではないし、たった1年住んだだけでも、多くの問題はよく見える。隠然たる差別や階級差はまだ存在するし、マナーの低下、頹廃的な行動も若い世代に多い。「子供を育てるのに一番ふさわしくない国」のレッテルを貼られた教育やドラッグの問題も深刻だし、医療サービスは甚だしい質の低下が叫ばれている。しかし、それでもパブで昼からビールを飲み、サッカーに一喜一憂して笑ってられる人々を見るにつけ、それも悪くないと感じずにはいられない。どうにも「テキトー」にしか見えないこの国の背骨に培われているものは、とても豊かで、堅牢なのであった。

4. おわりに

今改めて振り返ると、この留学では、思い描いていたよりも遥かにたくさんのことを学んだように思う。もちろん、雑事から離れて研究に没頭できたことは大きかった。しかしそれよりも、曲がりなりにも外国で1年間暮らしたという、その経験は想像以上だった。本欄に滞在記を寄せられた先輩諸氏もそうであつたろうと思うが、言語や文化、習慣の異なる環境で暮らすためには、やはり大なり小なりの苦労が当然つきまとう。言葉が分からなくてもギリギリのコミュニケーションを取らざるを得ない場面にも遭遇するし、習慣ややり方の違いから来るストレスも少なくはない。しかし、それらを越えることで、異なるバックグラウンドの人達と理解し合い、主張し合い、そして尊敬し合うために、言語そのもの以上に何が必要か、多くのことを学べたと思う。大げさに言えば、生きていくための基本的なスキルが、多少なりとも磨かれた、とでも言おうか。この体験を糧に、また日々少しでも精進していきたい。

最後に、滞在中大変お世話になった Simon Biggs 教授、酒井健一博士をはじめグループの皆様へ感謝します。また、何かにつけ気にかけて下さった Mojtaba Ghadiri 教授、留学前に相談に乗っていただいた京大東谷公教授、そして、留学を認め快く送り出して下さった産業技術総合研究所リサイクル基盤技術研究グループの小林幹男リーダーをはじめグループの皆様へ、この場を借りて厚く御礼申し上げます。